

清水将大著「二宮金次郎に学ぶ成功哲学」コスミック出版 2009年8月25日刊を読む

日々の努力を軽んじるな

1. 桜町陣屋の近所に、陣屋入りの豊職人で源吉という者があった。弁も立ち、才気もあったが、大酒飲みでなまけぐせがあったから、困窮しており、年末になって金次郎のところへ来て、餅米の借用を頼んだという。金次郎はこれに対して、「そなたのように年中家業を怠^{おこた}って、働かずにおって、銭さえあれば酒を飲む男が、正月だからといって、一年間勤苦勉強して丹精した者と同様に餅を食おうというのは、心得違いもはなはだしい。正月というものは、不意に来るものではない。米も偶然に得られるものではない。三百六十日明け暮らして来るのだし、米は春に耕し、夏に草をとり、秋に刈って、初めて米となるのだ。
2. そなたは春は耕さず、夏は草を取らず、秋は刈りとらずだ。それで米がないのは当たり前のことではないか。だから正月だからとて餅の食える道理のあるはずはない。今ここで貸しても、どうして返せるのか。借りておいて返す道がなければ罪人になってしまう。正月に餅が食いたいと思えば、今日から遊惰を改め、酒をやめて、山林にいて落葉をかいて、積み肥をこしらえて、来春田を作って米をとって、来々年の正月、餅を食うべきだ。だから来年の正月は、おのれの過ちを悔いて、餅を食うことをやめるがよい」と懇々^{こんこん}と説諭した。
3. この源吉は、金次郎の言葉に大いに悟るところがあり、「今日から遊惰を改め、酒をやめて、年が明けたら二日から家業を始めて、刻苦勉強して、来々年の正月は人なみに餅について祝えるようにしたいと思います」と、懇切な教訓を厚く感謝していとまごいをし、しおしおと門を出たという。
4. このとき金次郎は、源吉をにわかに呼び戻し、「私の教訓がよく腹に入ったか」と聞くと源吉は、「まことに感銘いたしました、生涯忘れずに、酒をやめて精を出します」と答えたので、金次郎は白米一俵・糯米^{もちごめ}一俵・金一両(約十万円)に大根・芋などを添え与えたという。
5. 源吉はこれにより生まれ変わったようになったという。金次郎は、このようにして勤労を教えるとともに、実際に人を養うことにも心を尽くした人であったので、この類^{たぐい}の話は尽きることがない。

[コメント]

- 2010年3月8日 林明夫記 -